

屋城にも赴いたのだが、名護屋城に着いたとたんに俄雨が降りだし、そして名護屋城博物館は耐震工事のために臨時休館となっており、案内をしてくれた友人と私以外、

誰もいなかった。ゆっくりと名護屋城跡を巡ろうと思っていた私は、その展開に、ある奇妙な思いを抱いた。

「日本を観る」から「日本を感じる」へ

韓 男洙
(漢陽大学校)



1月9日、私は初めて日本の横浜市神奈川大学にある非文字資料研究センターを訪れていた。その日の午後は、宿舎にスーツケースを置いてすぐにセンターの資料室へと向かった。資料で埋め尽くされたその部屋から醸し出される独特な香りと、収集された資料の保管方法は、そこを訪れる者に一種の目新しさと驚きを感じさせるものだった。私の中で、これこそ文字に非ざる資料を扱う研究センターの学術的な態度と性格とを示すものであるという感覚がひしひしと湧き上がってきた。これら資料室に納められた韓国や中国、そして日本に関する豊富な民俗資料を目の前にして、それまでの疲れも一気に吹き飛んでしまうほどだった。

私はこれまでに3度、日本を訪れたことがある。いずれも、調査を主目的としたものだったが、今回は初の一人での渡日となった。可能な限り多くのものを見てみたいという思いから、滞在スケジュールはタイトに組むことにした。そのため、日本でのフィールドワークを進めるうちに、自分の体力不足を痛感させられることになった。一方で、まったく馴染みのない土地へ行き、きわめて新鮮な事柄に触れることができたことで、毎回、疲れが一瞬で吹き飛んでしまうような心持ちになった。今回の滞在中、私は12カ所に及ぶ場所を訪れ、日本各地の民俗文化を体験することができた。ここに、その内訳を列挙してみよう。電車に乗り、都会のど真ん中や市場まで出かけたり、村に暮らす日本人のもとを訪ねたりしたほか、博物館や画廊、オペラや伝統的な演劇を見学したり、公園や神社を訪れたりすることもあった。ほかには、大磯の左義長（以前は神社で行われていたとされる厄払いの儀礼）や三浦のチャッキラコ（幼い子供たちの踊り。子供たちは鈴と稲穂をつけた竹を手を持って舞う）を見学する機会にも恵まれ、さらには名古屋まで足を伸ばして日本独楽博物館を訪問することもあった。これらの地で目にした様々な情景は、私の頭と心の中にしっかりと

刻み込まれている。だが、何よりも重要なのは、私の中で起こった「日本を観る」から「日本を感じる」へという感覚の変化だった。日本に来て触れた忘れがたい情景と雰囲気が、自ずと日本を受け入れ、そこから何かを感じ取るという方向へと、日本に不慣れな一人の観光客だった私を導いてくれたのだろう。

國學院大学は、私が今回調査のために訪れた一つ目の場所だった。ここでは、江戸時代の神社がどのようなものであったのか、その形式を一目で理解することができた。とりわけ、樹木の葉の形をした祭祀儀礼用の杯はきわめて精巧かつ精緻に作られており、それは神社の祭祀儀礼が定められた類型と式次第、規模といったものに基づいて行われていることを伺わせるに足るものであった。また、祭祀儀礼に用いられる白い冊子は「浄化」を象徴するものようで、別の機会に訪れたいくつかの祭祀の中でもその意味を再確認することになった。

今回の調査で特に印象深かったものとして、天候と人々の姿を挙げることができるだろう。天候といえば、大磯で行われた左義長に触れぬわけにはいかない。1月14日は、大雪の降った日である。私は朝の10時には現地に到着したのだが、すでに強風とかなりの量の雪が降っていた。問題は、強い風のせいで足を一步前に踏み出すのも困難なことだった。わずか200メートルばかりの短い距離を歩くのに、1時間余りの時間を費やしたような気がするほどだった。こうして、やっとの思いで海岸へと向かい、そこに設けられた9つのサイト（ワラでできた山。この中には旧年中に使っていた神棚のかざりやだるまが詰め込まれている）を目にすることができたのだ。砂浜を一步一步進むうち、しばらくすると例えようなない不気味な恐怖感が私を襲い始めた。今までにこのような天候の中でフィールドワークをしたことなどあるはずもなく、緊張から全身が強張っていくのがわかった。しかし、そこで前に進むのをやめたら、ぬかるんだ